

センターのシンクタンク機能を活用した学級集団づくり

－ Q－Uを通して －

主 幹・指導主事 中村 知佳
副主幹・指導主事 服部 有美
副主幹・指導主事 芦沢 令子
副主査・指導主事 小野 圭

キーワード 学級集団づくり Q－U センターのシンクタンク機能

I 主題設定の理由

令和3年度の山梨県学校教育指導重点では、確かな学力の育成、豊かな心の育成、健やかな体の育成、地域や世界で活躍できる人材の育成、特別支援教育の推進に向けて、教育活動の根底をなす教員と児童生徒との信頼関係や児童生徒相互の良質な人間関係を育てるために、その土台となる学級経営・ホームルーム経営・学年集団づくりに取り組むこととなっている。

こうした背景の中で本年度の研究協力校（以下、協力校という）甲斐市立竜王北中学校は、「自己肯定感を高め、豊かな人間関係を築ける生徒の育成」という研究主題と、「生徒一人一人を生かす望ましい学級集団づくりを通して」という副主題のもと、学習指導と生徒指導を学校教育活動の両輪と考え研究を進めている。

昨年度は、学習指導を中心として、「自ら学ぶ力を身に付けた生徒の育成」について研究を進め、One Page Portfolio（以下、OPPシートという）の活用に焦点を当てた指導が展開され、その充実が図られている。今年度は、学級の仲間との協働や対話、表現などの学級集団や学年集団づくりを軸にすることで、学習指導・生徒指導の両輪が相互に関連しながら、どちらも向上していくことをねらっている。

また、昨年度の本研究チームで行った研究から得た課題に、「協力校に対する支援の在り方について検討する必要性」があげられている。協力校の負担感を軽減させることも研究を行う上での大事な要素になってくると考えた。

そこで、本研究では、協力校の要望を基に、学校主体の研究を前提とし、協力校が要望する内容に対して、山梨県総合教育センター（以下、本センター）のシンクタンク機能を活用した学校支援をしていくことを目指すこととした。

II 研究の目的

学校が実施するOPPシートや「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ－U」（河村ら 2004 以下、Q－Uという）の分析を通して、教員の抱えている学級経営に関する課題解決への支援を行うことが学校支援として有効であるという仮説を立てた。これにより学級集団・学年集団づくりが充実するのではないかと考えた。

III 研究の方法

本研究では、以下のような取組を学校支援として取り入れた。

- ①協力校が校内研究で使用しているOPPシートを活用し、教員の学級集団づくりに関する悩みや不安、課題等を集約し、目指す生徒像を共有していく
- ②Q－Uの結果を基に、課題を共有し、課題解決に向けての助言を行う（Q－U活用学習会を通して）
- ③本センターのシンクタンク機能を生かし、学級集団づくりに関する講師の派遣
- ④生徒の育成のために本センターのシンクタンク機能を生かし、学校支援を行うことができたかをOPPシートを基に検証する

IV 研究の経過・取組

1 協力校のニーズに応じた支援

（1）校内研究に沿った支援

協力校では、昨年度まで「自ら学ぶ力」を身に付けた生徒の育成について研究を進め、家庭学習の取り組み方の工夫や、授業の振り返りに焦点を当て、生徒が自ら意欲的に学習に向かう手立てについて考え、実践的な取組を行ってきた。一方で、学習における仲間との協力、対話、表現といった良好な人間関係づくりに課題を残した。そのため今年度は、内面的な関わりを含む人間関係の構築

の充実を目指した研究が進められている。

昨年度、本研究チームの研究から課題となったのは、「協力校に対する支援の在り方」である。そこで、今年度は、学級経営の充実に向けて、協力校が主体となり、協力校の要望を基にした支援を大前提とした。表1の年間計画を立案するにあたり、協力校との打合せを複数回実施した。学校長や研究主任からの要望を受け、年間の中で、支援の場面をとともに設定した。

表1 協力校 校内研究年間計画

回	日にち	項目	内容
1	4月16日(金)		校内研究提案と検討会 教師集団によるワークショップ
2	5月24日(月)	学習会	集団づくりについて 講師：渡辺幸之助先生 (武蔵野大学特任教授)
	5月中旬～下旬		第1回Q-U実施
3	6月30日(水)	学習会	集団づくりについて 講師：渡辺幸之助先生 (武蔵野大学特任教授)
4	7月14日(水)	学習会	Q-Uを活用した集団づくり 講師：センター
5	8月23日(月)	学習会	集団づくりについて 講師：渡辺幸之助先生 (武蔵野大学特任教授)
	10月中旬～下旬		第2回Q-U実施
6	10月18日(月)	学習会	SOSの出し方に関する教育 講師：川本静香先生 (山梨大学准教授)
7	11月上旬	合唱指導	新型コロナウイルス感染症 拡大防止のため中止
8	11月17日(水)	研究授業&研究会	特別の教科道徳 指導助言：蘆原桂先生 (山梨大学客員教授)
9	1月7日(金)	学習会	学級集団づくり 講師：センター
10	2月9日(水)		本年度のまとめと反省 次年度の研究の方向性

(色付きは、本センターが関わった校内研究)

(2) 協力校の要望把握

協力校からの要望は、①Q-Uの活用、②学級づくりへ向けた教員の共通認識、③学級づくりへ向けた教員のスキル獲得の3点である。また、計画を整えた後も、協力校との打合せは随時行った。1月の研究日は、当初本センター指導主事による学習会を計画していなかった。しかし、協力校から年度の途中で要望があり、学習会を行った。このように、その都度要望に沿った形で協力校の校内研究を支援した。

(3) Q-Uを活用した集団づくり学習会

協力校は、甲斐市の「豊かな学び・豊かな育ち」推進事業の指定校でもある。それを絡めつつ、Q-Uを中心に据えて研究を進めていくことを確認した。

7月の学習会へ向けて、協力校と何度か打合せを行った際に、OPPシートの中から教員の悩みや課題が見えてきた。それが、協力校の研究主題に対する学級経営や自己肯定感を高める取組は、「どうしたらいいのだろう」「何からはじめればいいのか」という漠然とした悩みや不安感だった。そこで、協力校と悩みや課題を共有し、学習会での内容について要望を聞き取った。協力校からの要望は以下のとおりである。

①Q-Uの見取り方と注意点

②Q-Uの活用(可能であれば個ではなくチームで)

③学級経営に不安を抱えた教員のスキル獲得

④指導の方法や生徒との関わり方について

この内容をふまえ、Q-Uの学習会を計画した。

(4) 各種学習会への講師派遣

校内研究の計画に沿って、協力校の要望に沿った学習会を行った。内容は以下のとおりである。

①7月14日 講師 本センター指導主事

「Q-Uを活用した集団づくり」

②10月18日 講師

山梨大学 准教授 川本 静香先生

「SOSの出し方に関する教育について」

③11月上旬 講師 本センター指導主事

「合唱指導について」

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止

④11月17日 指導助言

山梨大学 客員教授 蘆原 桂先生

「『特別の教科道徳』の指導と評価の在り方」

⑤1月7日 講師 本センター指導主事

「学級集団づくり」

学校における生徒の生活支援や年度の後半に向けた学級集団づくりにつながる内容となり、研究を深める一助となった。

2 各種学習会について

(1) Q-Uを活用した集団づくり(7月学習会)

Q-Uの活用に関する支援の要望を受け、7月に学習会を実施した。Q-Uの見取り方と注意点、Q-Uの活用、学級経営や学習指導に関わる対応例についての講義を本センター指導主事が行った後、実際に協力校で実施したQ-Uの結果を用いて、全教員が学年ごとに分かれてグループワーク

に取り組んだ。グループワークでは、学級の状況把握と分析を行い(図1), 今後の方針を決定した。加えて、この学習会の最後に、生徒と関わり方や生徒の人権も含めて学びたいという協力校の要望に従い、ヒドゥン・カリキュラム(潜在的教育効果)を学ぶ時間を設けた。



図1 グループワークの様子

Q-U学習会の流れは以下のとおりである。

①学級の現状についての担任報告

Q-Uの結果や日常の様子から、担任が学級集団の特徴や気になる生徒を報告する。参加者は労いを前提に質問しながら状況を把握する。

②学級の状態の評価と方針の決定

Q-Uの結果や担任の報告を受け、参加者全員で該当学級のルールやリレーション(互いに構えない、ふれあいのある本音の感情交流のある状態)の確立度、Q-Uの型を見立てる。それをもとに、担任が学級づくりの当面の方針として「ルール確立」または「リレーション形成」のどちらかを選択する。

③具体的な対応の提案

担任の選択した方針を踏まえ、参加者全員でこの学級に対する具体的な対応の提案を行う。ここではブレインストーミングを用い、批判しない、自由に発言、質より量、アイデアの結合を意識する。

④具体的な対応の決定

参加者から提案されたもの、または担任が考えているもの、意見を融合・アレンジしたものなど、これからこの学級で実行することを、担任が3つ決めて参加者に宣言する。参加者全員の拍手で終了する。

※①~④の流れをすべての学級で実施する。

※学年ごとに学級の方針と具体策をまとめ、参

加者員で共有する。

Q-Uの結果からは、個々の児童生徒、学級集団、学級集団における児童生徒の相対的位置を把握することができるが、それが児童生徒からの評価であることが重要なポイントである。担任から見た学級像、担任以外の教員から見た学級像、児童生徒から見た学級像には必ず差異が生じるため、児童生徒の実態と指導法にミスマッチが起こりやすい。Q-Uはそのような差異を把握し、児童生徒と教員の実態に合った具体的な方策を考える大きな手立てとなる。

実際に協力校で行ったグループワークでは、参加者全員がそれぞれの学級を分析し、アイデアを出し合い、活発な意見交換が行われた。(図2)ワーク後のOPPシートに記述された感想からは、この活動の意義が明確に見える。

まず、「他の先生方の考え方に触れることにより、新たな視点を獲得できた」という感想が多く見られた。「互いの認識の違いに気づいた」「自分だけでは見えていなかった学級の課題がよく見えてきた」「自分だけで考えるより広がりが出る」など、特に、現担任にとっては自分の学級を客観的に見る機会となった。また、これまでの学級経営を振り返る機会になっていることも挙げられる。「なんとなく学級経営するのではなく具体策を考えることで、自分自身の実践の課題を見つけることができた」「ともすればアバウトになりがちな学級経営。思い込みを排除しなければならない」など、Q-Uの結果と併せて各々が指導や関わりを顧みる動きが出ていた。



図2 グループワークの様子

さらに、学年の全教員で取り組む重要性に触れている感想も多く見られた。各学級の現状や、要支援の生徒の情報、今後の対策を共有できたこと

で、「みんなで進むための大切な機会となった」「新しい生徒の一面や互いに気づいた点を共有できることは、学年集団をつくるうえでも重要」など、教員同士が互いに支え合う意識の醸成につながったと考える。

今回のように、Q-Uのデータを基にルールに則って話し合いを行うことで、誰からも意見が出しやすくなると言える。前向きな意見が出る仕組みとしてブレインストーミングの効果も大きい。このような活動が教員間で意見交換しやすい雰囲気づくりのきっかけとなり、学級経営は担任のものであるという学校文化に風穴を開ける動きにもなっていくはずである。「何よりも意見を言い合える学年集団が良い」「先生たちの教育観を感じ取ることができて良かった」「学校はやはりチームで動いていくことが大切」などの感想から、教員同士が世代や立場を超えて本音で語り合うことの意義を再確認できる。また、「毎年このような場を設けたい」という意見が複数見られたこともこれを裏付けているだろう。Q-Uは学級把握だけにとどまらず、校内連携促進のツールとして大きく機能すると言える。

(2) SOSの出し方に関する教育について (11月学習会)

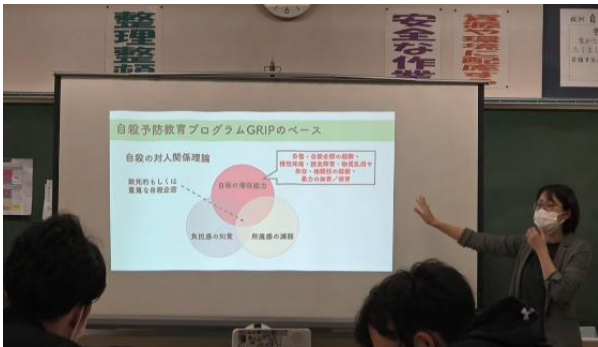


図3 学習会の様子

「SOSの出し方に関する教育」の推進については、平成30年1月に文部科学省・厚生労働省の連盟で発出された通知で、各学校や地域の実情を踏まえつつ、授業等の一環として、「SOSの出し方に関する教育」を少なくとも年1回は実施するなど積極的に推進する方針が掲げられている。協力校からも要望があり、山梨大学准教授 川本静香先生を講師として派遣し、「SOSの出し方教育を含む自殺予防教育について」の学習会を行った。SOSの出し方に関する教育が登場した背景や、

自殺予防教育との違い、各教育の授業例、実践のポイントなどについて学びを深めた。(図3)

講義後の質疑応答では、具体的な質問が次々と出された。危険域にいる無口な生徒へのアプローチや、重い内容の相談を受けたとき「相談してよかった」と思ってもらえるような言葉の返し方など、身近な生徒の顔を浮かべながら自分事として考え、真剣に対応しようとしていることが伝わる質問が並んだ。講師の具体的な指導・助言は今後の学級・集団づくりにつながるものであり、SOSを出したり受け止めたりできる関係づくり、相談しやすい学級づくりの重要性を改めて実感する機会となった。

(3) 特別の教科道徳 (11月研究授業と研究会)

授業を構成するにあたり、協力校と打合せを行い、協力校が悩んでいる課題を共有した。また、同時に、授業を構成する上でのポイントについて支援を行った。

授業者は7月に実施したQ-Uの分析を生かし、実践の中で、「リレーションづくり」に主眼を置き、集団づくりに取り組んできた。授業内では、意見を紹介し合う活動や、交流し合う活動を頻繁に仕組み、生徒たちは積極的に活動に参加している。また、学園祭へ向けて仲間へのメッセージを送るといった活動も、「リレーションづくり」として取り組まれた内容であり、生徒同士の関係は良好である。集団像を分析すると、学習意欲が高く、課題の提出率もよいことがわかる。

一方で、頑張り切れない生徒も少数ではあるが一定数いることも分かった。その点を課題と捉えた授業者は、困難や失敗があっても、それを乗り越え最後までやり遂げようとする意志、そして、達成された時の満足感から次への挑戦へとつながる勇気をテーマに考えた。生徒の実態に照らし合わせ、自己の可能性を伸ばし、人生を切り開いていく原動力や、生きることへの希望へとつなげるねらいをもち、授業を組み立てた。

研究授業で指導者は、事前アンケートを大型ディスプレイで表示し、生徒の考えを可視化、共有するとともに、指導者の弱さを自己開示することで、生徒同士の自己開示を促しながら、授業を展開した。また、小グループを設定し、様々な意見を認め合う場面を共有させ、「リレーションづくり」を意図的に仕組んだ。生徒は、他者の考えに

触れたり、自分の意見を認めてもらったりすることで、自分の考えを深めていった。(図4)



図4 研究授業の様子

研究授業後の研究会は、4グループに分かれ、「他の人の意見を参考にし、実践意欲が高まっているか」「教材からの学びを自分自身との関わりの中で深め、実践意欲が高まっているか」をベースに意見を交換していった。授業の流れや題材の在り方などについて活発な意見が出され、授業者・参加者がそれぞれの経験則を共有し、学び合う場となった。(図5)



図5 研究会の様子

また消極的な生徒であっても周囲の意見をしっかりと「聞く」ことができていたことや、授業者

が机間巡視の際に生徒の意見を認め、必要に応じて全体共有するタイミング等、学級づくりへの取組についても話し合われた。その後、本センターのシンクタンク機能を活用し、講師を依頼した山梨大学客員教授 蘓原桂先生に助言をいただいた。その中で、人間としての生き方について考えを深める学習がポイントになることや、授業者や生徒が自分のことを語るよう仕組むことなどの助言を受け、教員は道徳の授業づくりに関する理解を深めた。

(4) 学級集団づくり(1月学習会)

当初の予定では、計画されていなかった学習会であったが、協力校より、学級づくり・集団づくりについて本センター指導主事が講師となる学習会を行いたいとの要望により実現した学習会である。協力校からの要望は、学級づくりの視点から、実践例や自己肯定感を高める取組例について教員一同で共有することである。

学級づくりの実践例は、既に7月のQ-U学習会で扱っているため、協力校の研究主題である「自己肯定感」に着目し、学級づくりにおける自己肯定感を高める学級づくりの取組について、多面的な視点から捉えられるような学習会を設定した。以下に本学習会で使用した資料の一部を示す。

(図6)

学級・集団づくり
～自己肯定感から考える～

研究主題 自己肯定感を高め、豊かな人間関係を築ける生徒の育成	副主題 生徒一人一人を生かす望ましい学級集団づくりを通して
--	---

本日の目標
学級・集団づくりについて、様々な角度から俯瞰し、イメージを膨らませる

自己肯定感を高める

日本は「個の考え」より「集団の規律」を重視する風土
➡ 自己肯定感を高めにくい雰囲気

自己有用感に裏付けされた自己肯定感を高める
➡ 人のためになっている役にたっている人が笑ってくれた助かったと言われた自分の考えや知識が社会と繋がる自分の意見で授業内容が深まった

図6 学習会の資料(一部抜粋)

学習会を通して、教員の中からツールの活用例や活用場面での留意点などが質問として出た。新しい知見を得て、個々のスキル向上を目指した姿

勢が伺えた。(図7)



図7 学習会の様子

V 研究のまとめ

1 教員の変容の見取り

本研究チームは、学校が実施するOPPシートやQ-U調査の分析を通して、教員の抱えている学級経営に関する課題解決への支援を行うことが学校支援として有効であるという研究仮説を検証してきた。今回、協力校の教員が学習会後にまとめたOPPシートを本研究チームの検証に活用してもらい、その内容から教員の変容を見取り、研究仮説の検証を行った。

①OPPシートからの見取り

OPPシートの内容の中で、特徴的な2例を紹介する。A教員は、学級づくりについて、人間関係の再構築に向けた活動について悩んでいたが、何回か学習会を行う中で、学級づくりの具体的な活動をイメージし、実践したいと考えるように変容している。B教員は、生徒を指導する際の注意すべき点に悩んでいた。学習会を重ねるうちに、チームで共有・指導することなど、様々な視点を獲得していった。また、学習会を受け身で参加するのではなく、自身と重ね合わせて考察している姿が見取れた。このように学習会の中で、教員が意欲や指導に必要な様々な視点を獲得していたことが検証できる。

②ツールを使ったOPPシートの見取り

OPPシートの感想をテキストマイニングツールで集計すると、「見通す」「手立て」「共有」「分析」など、様々な視点による語句が頻出して

いることがわかった。同様に共起ネットワークツールで集計すると、例えば「できる」とつながる言葉として、「先生」「学年」「共有」「考える」「全体」「関わる」となっていた。つまり、学級経営や自己肯定感を高める取組に対して「どうしたらいいのだろう」「何からはじめればいいのか」と漠然としていた教員の悩みや不安が、「学年で考えることができる」「学年で共有できる」のようにチームで取り組んでいく視点に変容していると言える。

また、「SOSの出し方に関する教育」のような喫緊の教育課題に対する共通理解や、Q-Uの利活用の学習会等からチームとしての取組の重要性について、教員の共通認識が図れたことも読み取れた。

2 成果

本研究チームの研究の成果として、大きく2点挙げられる。

①様々な視点からのアプローチ

- ・活用場面に即した様々な指導・支援方法を学習会で提供することにより、教員自身が自分に合った(自分にもできそうな)アプローチ方法を考えるきっかけづくりになっている。
- ・Q-Uの利活用などの学習会を通して、教員集団で考えることにより、世代を超えた学びの場を提供できている。

②共通認識

- ・学級運営をテーマに、様々な世代が交わり、ベテランの教員の経験や知識を共有したり、教員の困り感を共有したりするなど、教員にとってよい機会となっている。
- ・Q-Uの利活用などの学習会を行うことで、教員集団で共通認識の下、生徒にアプローチできるようになった。
- ・共通の目標に対して、どのように共有していくのかについて、本センターのシンクタンク機能を生かした関わり方が支援につながっている。

この「様々な視点からのアプローチ」と「共通認識」は、相互に影響し合っていると考えられる。学習会では、教員同士が立場や年代を超えて、本音で学級や個々の生徒について話し合い、その中で、他の教員の考え方に触れたり、新たなヒントを獲得したりし、教員一人一人が学級や学年を客

観視した具体的なアプローチや活用場面に即した支援方法などの視点をもつことができたと推察する。また、担任一人が抱え込むのではなく、教員集団で、チーム学校で、組織的に学級づくり・学年集団づくりに動いていくことの重要性についての共通認識も、教員全体で確認できた。それとともに、協力校のニーズを反映したことが教員集団の意欲と相乗的に作用して、学習会はより実り多いものとなったと感じている。

以上のことから、本研究チームは、本センターが学習会をとおして継続的な関わりをもつことで、協力校の支援ができたと考えている。

3 研究を通して

協力校や大学アドバイザーの先生方より、以下の意見をいただいた。

①学校長より

- ・学校の研究テーマに基づき、講師を紹介してもらった。また、資料を用意し丁寧に指導してもらって研究を深めることができた。
- ・日々の実践につながる助言が多く、充実感のある学習会がもてた。この成果を今後も生かしていきたい。

②研究主任より

- ・専門知識を有するセンターの先生方が講師をしてくれたことにより、先生方の満足度が非常に高い学習会となった。
- ・本校の課題や現状を鑑みながら、必要な取り組みを一緒に考えて研究を進めてくれ、大変心強かった。

③大学アドバイザーより

- ・学校に任せっぱなしの研究ではなく、専門知識を有するセンターの先生方が学習会の講師を務めたり、ともに考える姿勢で支援や助言を行ったりと、学校に寄り添った研究の進め方により、研究の活性化が図られた点が素晴らしいと感じる。
- ・OPPシートを分析するのは、とても良いと思った。テキストマイニングを使って学習会の成果もまとめられていて、わかりやすかった。
- ・次年度は、研究開始前のデータを取ることと“生徒の自己肯定感や豊かな人間関係”が育成できたか否かを評価できるアウトカムを設定し、実践を始められるとよい。

4 課題

1年目の研究では、学級や学年などの全体への支援が中心で、生徒一人一人への個別の事案に対してはアプローチができなかった現状がある。そこで、来年度に向けての課題として、個別の事案への関わり方について支援していくことが挙げられる。さらに、学級ごとに行われた取組に対し、その後の適切な助言や具体的なアプローチも不足していたので、その支援も必要である。

また、教員や生徒から事前にデータを取得し、より客観的な見取りができるように研究を進めていく。

5 来年度に向けて

本研究チームは、協力校のニーズに応える形で研究を行うことを前提としてきた。今年度行った様々な学習会等で得た協力校の教員のスキルや、共通認識を図ったことを土台とし、来年度も協力校のニーズに応じる中で、本センターのシンクタンク機能を生かした支援を行い、実践データに生かしていく予定である。

今後も研究を通して、県下の学校にセンター研究の理解・利活用を図っていきたい。

【引用・参考文献】

- ・令和3年度 山梨県学校教育指導重点
- ・河村茂雄 他 編著 Q-U式学級づくり 図書文化社
- ・河村茂雄 編著 実証性のある校内研究の進め方・まとめ方 ~Q-Uを用いた実践研究ガイド~ 図書文化社
- ・河村茂雄, 粕谷貴志, 武蔵由佳, 藤村一夫 (2004) Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 小学校編 図書文化社
- ・指導と評価 2015. 4月号, 2016. 3月号, 2017. 12~2018. 2月号 図書文化社
- ・落ち着いた学級づくりにむけて ~Q-U, hyperQ-Uを活用した課題対応~ 岡山県教育庁人権教育課 平成31年3月
- ・ユーザーローカル テキストマイニングツール (<http://textmining.userlocal.jp/>) による分析
- ・生徒指導リーフ 文部科学省国立教育政策研究所 Leaf. 18

【協力校】

甲斐市立竜王北中学校 校長 依田 宏記

【山梨大学連携研究会アドバイザー】

山梨大学 准教授 川本 静香

山梨大学 客員教授 窪田 新治

【総合教育センター研究アドバイザー】

相談支援部 部長 玄間 修